

製品名: BARD1 ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab07466**

研究使用のみ

概要

| | |
|--------|--|
| 説明 | ウサギポリクローナル抗体 |
| 宿主 | うさぎ |
| 応用 | WB,IHC,ICC/IF,ELISA |
| 反応性 | ヒト、ラット、マウス |
| 標識 | 非共役 |
| 修飾 | 未修正 |
| アイソタイプ | IgG |
| クローン性 | ポリクローナル |
| 形態 | 液体 |
| 濃度 | 1mg/ml |
| 保存 | アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。 |
| 輸送 | 氷袋 |
| バッファー | 50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。 |
| 精製 | アフィニティー精製 |

応用

| | |
|------|--|
| 希釈倍率 | WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:5000-1:10000 |
| 分子量 | 79kDa |

抗原情報

| | |
|--------------|---|
| 遺伝子名 | BARD1 |
| 別名 | BARD1; BRCA1-associated RING domain protein 1; BARD-1 |
| 遺伝子 ID | 580.0 |
| SwissProt ID | Q99728 |
| 免疫原 | 抗血清はヒト BARD1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 1-50 |

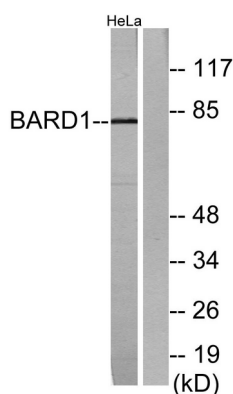
背景

この遺伝子は、BRCA1 の N 末端領域と相互作用するタンパク質をコードしています。in vivo および in vitro で BRCA1 に結合する能力に加え、BRCA1 の最も保存性の高い 2 つの領域、すなわち N 末端 RING モチーフおよび C 末端 BRCT ドメインと相同性を有してい

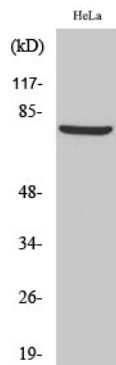
ます。RINGモチーフは、腫瘍抑制遺伝子や優性プロトオンコゲンの産物を含む、細胞増殖を制御する様々なタンパク質に見られるシステインに富む配列です。このタンパク質はまた、3つのタンDEMアンキリンリピートを含みます。BARD1/BRCA1相互作用は、BRCA1における腫瘍形成性アミノ酸置換によって阻害されるため、これらのタンパク質間の安定した複合体の形成がBRCA1による腫瘍抑制に不可欠な要素である可能性が示唆されます。このタンパク質は、乳がんまたは卵巣がんにおける発癌性変異の標的となる可能性があります。この遺伝子には、異なるアイソフォームをコードする複数の選択的スプライシング転写バリエーションがあります。注意: Met-1とMet-26のどちらがイニシエーターであるかは不明です。疾患: BARD1遺伝子の欠陥は、原発性乳がん、卵巣がん、子宮がんに見られます。機能: BRCA1-BARD1ヘテロダイマーは、DNA損傷修復、ユビキチン化、転写制御など、ゲノム安定性を維持するための多様な細胞経路を調整します。DNA損傷にตอบสนองして細胞周期を制御する中心的な役割を果たします。腫瘍抑制機能に必要なユビキチンE3リガーゼ活性を媒介することによって作用します。また、CSTF1/CSTF-50とヘテロダイマーを形成し、pre-mRNA 3'切断を阻害することでmRNAのプロセッシングとRNAP IIの安定性を調整します。経路: タンパク質修飾、タンパク質のユビキチン化。PTM: アポトーシス中に処理されます。ホモ二量体は、BARD1/BRCA1ヘテロ二量体よりもタンパク質分解による切断を受けやすい。類似性: 1つのRING型ジンクフィンガーを含む。類似性: 2つのBRCTドメインを含む。類似性: 3つのANKリピートを含む。細胞内局在: 細胞周期のS期には、BRCA1とともに個別の核内フォーカスに共存する。細胞質に移行することができる。二本鎖切断(DSB)によるDNA損傷部位に局在し、DNA損傷部位へのリクルートメントはBRCA1-A複合体によって媒介される。サブユニット: ホモ二量体およびヘテロ二量体。BRCA1とのヘテロ二量体(RING型ジンクフィンガー)。CSTF1/CSTF-50とのヘテロ二量体(ANKリピートおよびBRCTドメイン経由)。BRCA1-A複合体の構成要素であり、少なくともBRCA1、BARD1、UIMC1/RAP80、FAM175A/Abraxas、BRCC3/BRCC36、BRE/BRCC45、およびMERIT40/NBA1から構成されま

研究分野

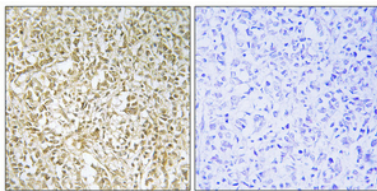
画像データ



BARD1抗体を用いたHeLa細胞ライセートのウェスタンブロット解析。右レーンには合成ペプチドでブロッキングされている。



BARD1 ポリクローナル抗体を用いた様々な細胞のウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト乳がんの免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4℃、一晩) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。